

隕石に怯えながら、僕たちは。

作・冬野氷夜
製作協力・奈落兎

3P… …	■	プロローグ
10P… …	■	1
15P… …	■	2
18P… …	■	3
22P… …	■	4
27P… …	■	5
31P… …	■	エピローグ
35P… …	■	あとがき、という名の言い訳

■プロローグ

もし、寝ている間に隕石が落ちてきたらどうする？

そんなことを考えながら、布団の中に入って眠りに就こうとする。けれども、なかなか寝付けない。深く考え込んでしまえばかりだ。

隕石が落ちたら死ぬ。

でも、どんな風に死ぬのかな、ってことを延々と。

痛いのかな？ 苦しいのかな？ 辛いのかな？ それとも

何も感じないまま死んじゃうのかな？

それに、死ぬとしたらどうやって死ぬんだろう？

圧死？ 焼死？ はたまた爆発四散？

ひよっとすると死体も残らないのかな。怖いなあ。

仮に死体が残ったとしても、欠片ほどもないような気がする。

爪の残った指に、焼け焦げる内臓。砕けた白い骨に、剥き出しになったピンク色の筋肉。壁に叩き付けられた頭蓋骨と、そこからこぼれ出てくる脳みそ。体内に残っていたはずの老廃物。血。涙。

それらを掻き集めたところで、元に戻すのは不可能だろう。終わり、おしまい、完。死体になるってのはそういうことなんだろうなど、漠然と思う。

思うだけ。何もわかっていないから。

わかんないけど、どうなるのかなって答えの出ない妄想を

繰り返している。

延々と。

いつ終わるのかわかんないってくらいに延々と。

気が付けば、眠れないまま朝を迎えることだってあった。

そうして、朝を迎えて、学校に行って、眠気と戦って、放課後になったら家に帰って、色々なことをして布団に潜る。

その時にまた考えてしまうんだ。

隕石が落ちたら云々とか。

最近の僕は、いつもこうだ。

同じことの繰り返し。延々と続く繰り返し。

答えが出ないとか、出たとしても考えてしまうだろうって

悩みに苛まれながら、僕は布団の中で夜を過ごす。

頭の中はグルグルと回り続けてる。いつか焼き切れてしま

いそう。

夜になると僕は、布団の中で哲学者になる。

隕石が落ちてきたら僕はどうなるのかをテーマにして、鏡に映った自分自身と議論する。終わりのない議論を飽きることなく。

頭の中にある鏡には、僕の姿が映っていて、それを見るたびにいつも無知だなと鏡に向かって吐き捨てたくなる。

鏡の中にいるのは僕。僕は鏡の中にもいる。

ねえ、どうして僕は進歩しない？ どうして隕石が落ちたらどうなるかって答えが出ないまま延々と繰り返しいら

る？ 頭おかしいんじゃないのか？

そうやって僕は、自分の頭を疑いながら、延々と自分自身と議論し続ける。

隕石の件について。

一昨日も、昨日も、今日も。おそらくは明日も。

終わらない話を繰り返している。

でも、なんとなく疲れてきた。

ずっと泣き続けていたら疲れるのと同じように、考え続いても疲れるものだから、仕方がないと思う。

かといって、簡単に眠れるわけでもない。

今日も無理だ。

不眠症、ダメ・ゼツタイってわかっているのに。

不安がブワツと涙みたいに溢れ出てきて、無性に息苦しくなる。

隕石が落ちてきたらどうしようとか、僕はどうなってしまうんだらうって。

眠れないのなら、何かで逃避しようと思ったけれども、特に手を出す気になれなかった。

仮に小説のページを捲ろうとしたら、そのページで誰かが死ぬ描写が出て来そうで怖い。

なんだろう、創作だから本当に死ぬわけじゃないんだけど、そういう描写を目にするのが怖くなる。陽が沈む前まで、のめり込んでいたものでも。

こんな夜は、いつもそうだ。

隕石が落ちてきたらどうしよう？

またこれだ。

なんで、僕は飽きることなく、そんなことばかり考えてしまうんだろう？

答えが出たところでどうしようにもないっていうのに。

ふと僕は、気を紛らわせるために女の子を妄想してみることにした。

ほんの少しくらいは、好みの女の子について考えてみるのも良いかもしれない。

ちよつとは頭が痛くなりそうなことを考えなくても済むかもしれないから。

煩惱や卑猥な妄想は僕を救う。

そうあって欲しいよ。

というわけで僕は、今まで楽しんできた漫画やアニメにゲーム、小説や映画などから、色んな女の子を思い浮かべて、シャッフルして組み立て始めた。

パズルみたいな感じで。

そういえば、文章をバラバラに刻んでランダムに繋げる手法があつて『カットアップ』と呼ばれているそうだ。

ツギハギのパッチワークみたいだね。

人間の死体を繋ぎ合わせたフランケンシュタイン系ヒロイン。

あらやだ、ちよつと斬新かもしれない。

いや、もうすでにパイオニアはいるとは思うけど。

僕の考えたヒロイン。

空想上の人物。

どんな女の子になるかは僕にもわからない。性格は少しだけわかるけど、外見になるとさっぱりわからない。

僕には、妄想したヒロインを具体的に描写出来るほどの画力を持っていない。

文章で外見描写をすればいいって？ やめてください、死んじやいます。

服や髪型の名前とか、正直わからないことだらけなんだ。とにかく、そんなノリでヒロインを脳内に思い浮かべてみる。苦手だけど文章での外見描写付きで。

可愛くて、眼鏡。コンタクトはノーセンキュー。誰が文句を言おうが知ったことか。良いじゃないか眼鏡っ子。僕は好きなんだよ。

とりあえず、ヒロインに着せる衣装は、最初はメイド服で試してみることにする。メイド服くらいは、僕だって知っているからね。

んで、そのメイド服な眼鏡っ娘は萌え萌えっとしていて、布団の中で悶々としている僕を慰めてくれるんだ。

「ご主人様あ」

うん、良いイメージっぽい。実在していたら、同意のもとにファックしたいね。どんな状況になれば、そうなれるかはわからないけれど。

「初対面の女の子に向かって、最初に告げる言葉がファックですかご主人様。自分で産んだ幻覚に欲情しないでください

よ」

「やっぱ、お前帰れ。僕の頭の中に」

いや、まあ、うん。やっぱ無理だった。

僕に可愛い女の子というか、萌えるヒロインを産み出すなんて無理だったんだよ。

だって、どことなく性格が香ばしい感じがするんだもの。目の前にいる僕の脳内彼女は。

「産み落とした途端に、帰れとは失敬な」

「産み落としたとかいう言い方やめい。実際にお腹痛めて産んだみたいで、嫌だ」

お腹を痛めて産んだ子供じゃない。頭を痛めて産んだ子供なんだ。つまり、彼女は僕にとって娘で、僕は彼女にとって父親であり母親なのだ。

「なるほど。つまり、あたしは娘だということなのですな。

ママ」

「……」

やばい。

ママって呼ばれるのは、すごく気持ち悪い。僕が女性じゃなく男だからだろうか。ちよっただけ吐きそうな気分だ。

「ありやりや、反応なしですか。となると、次は……パパ？」

「うん、やっぱり帰ってくれ」

パパ呼ばわりされるのもなんか嫌だなあ。

あまりにも嫌すぎて、背筋がゾワゾワと震えてきて、鳥肌も立ってきたぞ。

恐怖でも感じてるんだろうか、僕は。

「……ところで、あたしのキャラってブレてませんか？」

「言うな」

ヒロインに何か面白いこと言わせてみようかなと思っただけ、なかなかそういうのが浮かんでこないし、何より慣れていない。

そもそも、キャラが立ってるような女の子を思い浮かべるだなんて、脳内彼女初心者の僕には無理だったんだ。

とやかく、閑話休題。

少し黙っている内に、落ち着いてきたから話を戻すことにする。

「――で、ご主人様は、隕石が降ってきたらどうしようということで悩んでいる、と」

「まあ、そうなる」

「夜、布団にこもっても眠れなくなるほど、と」

「うんうん」

「……かなり、しようもないですね」

それを言わないでほしい。

自分でもしようもないってことくらい、自覚はしてるんだからさ。

「だいたい、隕石なんて、そう滅多に落ちるもんじゃないでしょうに」

「小さいのとかは、たまに落ちてるよ。たまにだけど」

「そういうのは大抵、世界がおしまいになる、ってほどの大

きさじやないと思いますけどね」

「大きさはそんなに問題じゃなくて、隕石が降るってことが不安なんだよ。そりゃあ、大きいのが降ってくるのは困るけどね。でも、ちっこいのでも、当たったら死にそうだ」

「確率は？」

「えーっと、そこそこ……だったような？」

「嘘は駄目ですよ、ご主人様。雷に当たって死ぬより低い、ってどこかで聞いたはずじゃないですか」

「で、でも、この世界には五回ほど隕石に当たった人がいるって話を聞いたことがあるし」

「普通はねえですよ！ そんな極端な例は！」

まあ、雷に当たって死ぬ方があり得そうかもしれないけど、隕石に当たって死ぬのも怖いよね。スイカみたいに粉々になるのかなあ。

「いやに、隕石にこだわりますねえ……」

「感電死より、グロイ死に方になりそうだからね」

もし、隕石が当たっても痛覚が残ってたら、死にそうなほど痛いだろうなあ。

どうせ死ぬんだから痛みなんて気にするな、とは思いますが、けど、すっごく痛そうだな。怖い。

「感電死の方がエグそうですね。筋肉がヤバイほど痙攣したり、人の形が残ってるのに死臭が酷いとかで」

それを言うのは、止めてくれ。

隕石のことだけでも精一杯なんだから。

「それはそうとして……なんというか、隕石への恐怖が半端ないですね……」

「原始的な恐怖として、頭の中に刻み込まれてるのかもね」
遙か昔、隕石の爆風に巻き込まれた古代生物の恐怖を。

ひよっとすると僕は、当時隕石に襲われてた彼らの恐怖を受け継いでるのかもしれないな。

「ところで、君は一体誰なの？」

よくよく考えてみれば、僕が生み出した妄想上の存在とはいえ、挨拶もしていないのは失礼だよなあ。

でも、僕以外には見えない架空の存在に挨拶するのって、はたから見ると怪しい人みたいだ。

酒に酔っているのか、頭がおかしいのかと思われそうなくらいに。

「その話は、隕石の話をする以前に終わらせとくべきでしょうに……。と、とにかく、単刀直入に言うところ——妄想上のヒロイン、的なアレですよ、はい」

とにかく、失礼なことを考え始めている僕に対して、彼女は自分のことを話してくる。

えーっと、やっぱり彼女は僕が生み出した妄想上の存在である、というわけか。すごいな僕の妄想。目の前に本当に女の子がいるみたいだ。

そういえばこれって、もった的確な言い方があったような気がするようないような。

あ、思い出した。

あれだよ、あれ。

「ああ、イマジナリーフレンド的な」

「身も蓋もない！？」

たしか、空想の友人って意味だったはずだ。

友人……かどうかは、正直かなり微妙だけれども。

「まあ、あれだ。僕が生み出したにせよ、ほとんど初対面の他人であることに変わりはないわけで」

「自分と繋がってるはずのイマジナリーフレンドを、こいつは他人だと言い切る人を初めて見ましたよ……」

僕も、自分自身から生まれたイマジナリーフレンドなんて、初めて見たよ。

意図的に僕自身で生み出したようなもんだけだし。

「というわけで、自己紹介。僕は僕。名前は言わなくてもわかるようだから省略っと。次はそっちの番ね」

「酷い省き方ですね……。んで、あたしの番、ですか。ぶっちゃけると名前とか無いんですが」

「え、無いの？」

空想上の人物でも、一つや二つ……いや、三つ以上も名前を持つても不思議じゃないと思うんだけどなあ。

「ペンネームはともかく、本名は三つ以上もいらなそうですよ！ 人にもよりますけども！」

まあ、確かに本名がいくつもあったら大変だ。

ペンネームみたいに使い分ける、ってわけにもいかないだろうし。

一応考えてみようかな。

「じゃあ、とりあえずテキトーに……ポチとか」

「うわあ、犬っぽい名前……じゃなくて、本当に犬に付ける名前じゃないですか！ しかも、古典的な！」

「考えてみれば、生まれてこの方、ポチって名前を付けられた犬を見たことないや」

アニメや漫画では、時折ポチって名前のキャラが出てくるのを見たことがあるけど、現実だとあんまりいないよね。

「とにかく、ポチは没でお願いしますよ、ご主人様」

「じゃあ、花子で」

「トイレの、なんて言いませんよね？ つか、テキトーに決めすぎのような……」

うーん、名前なんてテキトーに考えられてるのが多いような気がするんだけどな。

僕の名前は、その例に当て嵌ってるかわからないけれど、少なくともクラスメートに、いかにもテキトーに考えられた名前がたくさんあった。

シンプルだとか、ありきたりだとか、そういう意味じゃない。俗にいうDQNネームと呼ばれるやつ。天使と書いて、マリアと呼んだりするあれ。

ちなみに、天使さんは真面目な性格の人で、色々と痛い両親との縁を切るために密かに頑張っているそう。応援してるよ。

それはともかく、うーん。名前か……。

あんまり良いのが浮かんてこないけど、一つだけ思い当たるマトモそうな名前がある。

とりあえず、それにしておこう。

「じゃあ、翼で」

「翼……って、それ、ご主人様の名前じゃないですか」
翼。僕の下の名前。

他の人から、不相応だと言われるような名前だね。

正直、あんまり好きじゃないんだ。嫌いでもないけど。

「その名前あげるから、名前以外の呼び方で呼んでくれよ」

「ご主人様とか、ダーリンとか？」

「……前者はともかくとして、後者は無しで」

女の子にご主人様って言われるのはそそるが、ダーリンって呼ばれるのは虫酸が走りそうで嫌だ。どこことなく響きが嫌いなんだよね。

「んじゃ、あたしの名前は翼で。それで良いですよ、ご主人様？」

「うん、大丈夫」

とりあえずは、だけでも。

「それで話を戻しますけども、問題は隕石と」

「そうそう」

「隕石に当たって死にたくないから、もし本当に隕石が降ってきたらどうしようと考えちゃう的な」

「割と当たってるね」

「ご主人様の脳みそから生まれてますから」

妄想的な意味で良かった。

物理的に僕の脳みそから産まれたとしたら、かなりホラーな光景になってただろうし。

「で、割と、ってどういう意味ですか？　そうでないところがあるだけでも？」

「いや、まあ死にたくないって思う割には、生きたいって情熱もそんなにないわけなんだ」

「具体的に言うത്？」

「絶対に死にたくない……とは言いつれ切れない程度に」

「微妙に諦めの境地に入ってますん？」

「絶対に死んでやる、と言わないだけマシだとは思うけどね」

僕は、彼女——翼の顔を見つめる。

どこか真剣そうな瞳を覗き込むように、ジッと見つめてみた。

あらゆる光を吸い込んでしまいうような黒目。見つめているのか、見つめられているのか、なんだかよくわからなくなってくる。

「まあ……そうだね。僕は、死にたくないって思うくらいには、僕自身のが好きだよ。それなりに」

「自分、好きなんですか？」

「うん、それなりに。僕も、僕の全ても——片割れのような君も」

「あ、うん、ありがとうございます……ご主人様」

僕の分身のクセに、照れちゃってまあ。よく見ると、可愛

いじゃないか。中の人が僕だけど可愛い。さすが、僕の理想のイメージ。ちゃんと萌えるキャラになってるよ。

まあ、僕にしか萌えられないかもしれないけど。

「……割と好きな自分自身が、隕石によって跡形も無く消し飛んでしまうのが嫌なんですか？」

「どうだろう？　あんまり僕自身もよくわからないんだ。知りたいと思う程度には気にしてるけど」

でも、僕らが死にたくないと思っても、隕石は容赦なく殺しに来るんだろうなあ。地震や津波のような災害と同じように。

唐突に現れては、世界をズタズタに引き裂いていく。

「もし、隕石が落ちるとしたら。落ちる前に、一つだけ願っておきたいことがあるんだ」

「それって、どんなことですか？　ご主人様」

「どうか、僕たちを——欠片ほども残さないでください、ってね」

僕たちの全てを、夢だったことにしてください。

そんなことを少しだけ願っている。

本当に、少しだけ。

もしも、たればの話として。

脳の細胞の一つ一つに、試験管があったとする。

その試験管にはラベルが貼られていて、それぞれ一つの言葉が書かれている。

中には、得体の知れない液体が入っていて、ゴム栓か何かで封をされている。

その試験管には、どれもこれも液体が入っているのだけれども、完全に満たされているものがない。

八割ほどのものもあれば、一割ほどしか入っていないものもある。

けど、それらの方がマシだ。

ほんの数滴しか入っていない試験管も数え切れないほどあるのだから。

僕の脳も同じように、その試験管が頭の中にある蜂の巣に差し込まれている。

無限にありそうな穴を、ピッタリと塞ぐかのように。

だけど、その試験管は、やっぱり満たされていないものばかりだ。

ラベルに書かれた言葉に関する認識が欠けている、主張しているかのように。

例えば、『ミステリ』と書かれている試験管があるとする。その中には、それなりの量の液体が入っているのだけれど

も、満たしているほどじゃない。

そんな中途半端な液体には、今まで吸収してきたミステリ小説やドラマの知識が凝縮されている。『モルグ街の殺人』の犯人は誰だったのかとか、『黒死館殺人事件』の文体の難解さだとか。

とにかく、そこその知識が液体となつて、試験管の中にあるわけだけど、満たされるほどは無い。

足りないからだ。

僕にミステリの知識も勘も足りないからなんだ。

トリックの知識が足りない、ノックスの十戒やヴァン・ダインの二十則への理解が足りない、読書量も足りない。

おまけに、それ以外の何が足りないのかさえ分からない。

足りない何かを判別する、勘のようなモノも欠けている気がする。

かといって、漠然と情報を取り入れようとしても、散漫と歩いて上手くないかない。

他の人たちはどうやって、頭の中に情報を詰め込んでいるんだろう？

ひよつとしたら、僕は他の人よりも情報を記憶できないのかもしれない。頭のスペックが人並み以下に足りないから。

もしそうだとしたら、僕は常人の背をどう追いかければ良いんだろう？

「追い付かなくても良いじゃないですか。世界に一つだけのオンリーワンってやつですよ」

「出来ることなら追いつきたいんだよ。あと、オンリーワンは嫌だ。自分自身について微塵も悩んでないみたいじゃないか」

「面倒な思考ですねエ……ご主人様のそれは」

そうだろうか？

自分自身について悩むことさえ忘れてしまうなんて、とても怖いことだと思うけど。

「自分自身のことが、不安ですか？」

「漠然とね」

どうしてだか、上手く説明できないんだ。

ちゃんと論理付けてみようとしても、ボンヤリと情報が霞んで、最後には消えてしまう。

まるで、頭の中にあつたはずの処理回路を壊してしまったみたいだ。おそらくは物理的に。

「いつかどこかで頭でも怪我したんですかね？　そうまで不安に思うってことは」

「……ちよつとだけ、なら」

心当たりなら一応ある。

「やっちゃったんですか？」

「小学校の頃に、クラスメートに突き飛ばされて、教室の扉の窓ガラスに頭をぶつけたことなら」

いやあ、あの時は酷い目に遭った。

「……それ、下手すりゃ死にませんか？」

「学校って、時々法律が通用しないみたいなんだよ……」

いじめを『ただ遊んでいるだけ』と解釈して、都合の悪いことをなかったことにする……なんてことは結構あつたしね。まあ、それは何も小学校の話だけじゃないんだけど。

「んで、頭をぶつけた時どうなりましたか？」

「結構、ドバドバと血が出たよ。額が切れて、そこからね。

何針か縫つたな」

「かなり痛そうですね……」

絵面的に見ても、かなり痛い光景だった気がする。

傷口からボタボタと血が流れているのと見ている内に、何かが失われているような気がして怖かつたな。

あ、ひよつとすると、頭の中の何かが壊れたんじゃないか、何かを失っただけなのかもしれないな。

「ところでさ、脳漿ってあるだろ？　僕らの頭の中に」

「まあ、ありますね。脳などを満たしている液体、という意味でなら」

「あれってさ、脳の中にある試験管が割れて、こぼれ出てきた液体……と同じものだと思うんだ。知識というか、情報の塊」

「脳漿が飛び散ると同時に、何かの情報を失ってしまうとでも？」

「真偽はともかくとして、あり得そうな話じゃないか。脳漿を失えば失うほど、頭の中にあつた情報が消えていく、なんてのは」

実際に現実でも起こりえそうな光景じゃないか。

本当に起きるのかどうかは別として、リアルっぽいと思うね。

「物理的に？」

「物理的に。情報が液体となって、ドバドバと」

血みたいに、さ。

「となると、頭の傷から出血死した人の身体って、最後にはスッカスカになるんですかね？ 血と一緒に、情報が抜け切って。まるで、抜け殻になるみたいに」

「さあ、どうだろう？ その頃には、もう死んでるだろ？ 自分の中にあつた情報をどれだけ失ったか、確認のしようがないじゃないか。死体に意識があるかわからないからね」

死んだ後にも、痛覚が残っているのは嫌だけでも。

「まー、普通に考えると、死体に話を聞くことって出来ませんからね。死んでから何を考えたのか、なんてのは」

「ところで、『死んだ何々君は、そんなことを願っていないよ』とか死者の意思を補完しようとしている人がいるけど、あれってなんなんだろうね？」

「生者の特権を最大限に利用しているだけじゃないですかね？」

「死人に口なし？ 自己満足？」

「多分、きっと。おそらく」

死者というのは、生者に文句を言うことも出来ないんだろ
うなあ。 色々と同情するよ。

「そう考えると、自殺者ってすごいですねエ。死んだら、生

きてる人たちの食い物にされるとわかっているのに、それでも死ぬことを選ぶだなんて」

「色々と考えるだけ考えて、やっぱり死ぬ方がマシだと決断したからじゃないの？ 或いは——」

「或いは？」

——或いは、生者の食い物にされると知らずに死んだのか
もしれない。

無知なままで、投げ出すことしか知らなかった。

抗うために必要な術や、情報を持っていないままで。

死ぬという選択肢しか見えなかったから、選んでしまった
ような。

そういうことも、ありそうな気がする。

「ちよつと、やるせませんね。知らないから、死ぬことしか
選べないだなんて」

「当人たちは、なけなしの勇気を振り絞っているだろうに」

それなのに、死体を貪られるなんて残酷だ。

「自殺するのって、とてつもないほど勇気がいるよ」

「勇気、ですか？」

「死んだらどうなるかなんてわからないのに、死んだ方がマ
シだって思っ自殺を選ぶ。あんな漠然とした概念に身を委
ねるなんて——怖くて、勇気がいるよ」

あんなに怖いものの方がマシだと思うだなんて、自殺する
人たちが見てきた世界はどれだけ気持ち悪いものだったんだ
ろう？

「でも、周りの人に迷惑をかけまくってでも生きてやるとか、ムカつくやつを皆殺しにするだとか、そんな勇気があっても良いと思うんですよ。少しくらいは」

そんな中、彼女が危うげなことを言いだした。

出来るだけ、過激な言葉は止めて欲しい。

「……危険思想？」

「少しくらいは、です。例えば、いじめられたのを苦にして死ぬとか、あれって最悪ですよ。むしろ、いじめっ子が死ぬよと思いますよ」

一般的な道徳はともかくとして、言いたくなる気持ちもわかるなあ。

「まあ、それはなんとなく」

「或いは、自分が正しいと思うことなく、永遠に自分が間違っているか疑い続けて生きていけとか。人をいじめたことを反省せずに生きていくなんて、クソですよ、クソ！ うんこ！ うんこ人間！ 人間のようなうんこ！ つーか、うんこ以下！」

「それに関しては同意だけど、叫ぶな。あと、うんこ言うな」

「じゃあ、スカで」

「それも止めい」

ニツチな成人向けになりそうだな。

でも、僕はそんなに嫌いじゃない。女の子が羞恥に悶えるのが良いと思うんだ。

「……ちよっと引きますね」

「ちよっとで済むのか、僕の妄想。それなら、ちよっとこれからトイレに行こうか」

「前言撤回、絶対に嫌です！」

ちよっと残念だ。

「と、とにかく、何も悪くない人が死ぬってことが嫌なんです。まー、ロクでもない人が死なないってのが、無性に気に入らないだけなんですけども」

そのところ、少しでも良いから、どうにかなって欲しい気はする。

「因果応報って言葉好きそうだね、翼は」

「ハンムラビ法典の一部の供述も好きですよ。目には目で、歯には歯で……ってね」

「かと言って、それで傷付いた人が癒えるわけでもない」

「あたしとしては、傷付いた人が救われたり、頑張った人が報われたりして欲しいものです。でないと、クソですよ。こんな世の中」

「トイレ行こうか」

「あたしの生みの親とはいえドン引きですよ、ご主人様！ というか、茶化さないでください」

「茶化さないと、堂々巡りになりそうだし」

答えが出ない問題は、ある程度のところまで切っておかないと、延々と囚われてしまうからね。

我思う、ゆえに我あり。

コギトエルゴスムも良いけれど、疑っている何者かが存在

することは真実だ、なんて確証はどこにも無いと思うから。
「というか、ご主人様は怒らないんですか？ この世の中は
どうしてクソなんだとか、こんなの絶対におかしいよだとか、
蛆虫とか、土に還れ生ゴミとか、どうして感情を荒立てて怒
らないんですか？ 少しは怒ってくださいよ、人間らしく」
そう言われてもなあ。

「怒るって——どうやるんだったつけ？」
まるで、どこかに忘れてしまったみたいなんだよ。

まだ身体が幼かった頃の僕は、それなりに怒りを浮かべていられていたと思う。

いつもいつも、何か不条理を感じた時に感情を爆発させてきた。

言葉や行動を武器にして。何もかもを滅茶苦茶にしてしまえば、それで何か一つくらいはマシになるんじゃないかって思いながら。

——大抵の物事というのは、上手くいかないのが当たり前なのだけれども。

結局、僕がしたことに意味は無かった。

きつと、報われることの無い努力を重ねてただけだったんだと思う。努力すれば、大抵のことは報われるんだって。綿菓子みたいな夢を見る子供みたいにさ。

大半が実の無い怒りだったってのは、僕にもわかっていて。怒る、怒る、怒る。その繰り返し。意味のないループのよう。

僕の怒りのほとんどは、単なる八つ当たりや癪癪だったんだろうと思う。上手くいかないことや、不条理に対して怒ることしか知らなかった。

それから、それなりに歳を経て、なんとなくわかってきた。身の丈に合った感情や、的確な行動というものがある。

これが、大人になるって感覚なのかもしれない。

子供の頃から後悔を重ねていき、何が駄目だったのかを覚えていく。そして、次は間違えないようにする。

だけど、幼い頃に積み重ねた足枷が、今も僕の邪魔をしているような気がするんだ。

父さん。

僕が憎んでいる父さんは、いつも僕が幼かった頃の話をする。いつもいつも。サッカーが微塵も上達しなかった僕の話をしてくる。

「父さんがお前と同じ歳には、この程度のことは出来た。だから、お前にも出来るはずだ」

子供の頃の自分が出来たからと言って、息子である僕にも同じことが出来ると、のたまうのは止めて欲しいな。聞いて吐き気がする。

「お前は、何一つ成長してないな。子供のままだ」

ついではばかりに、今の僕について駄目出しもしてくる。どうして僕の全てを知らないのに、そんなことが言えるんだろうか。

「お前よりも世間を知ってる俺の方が正しい」

世間って、どこにあるんだろう？

それに、父さんの世界って、どれくらい広いの広さなんだろう？ 何も知らないはずの僕にも教えて欲しいよ。✖

とにかく、こうにはなりたくないって気持ちがある。胸の中にこびり付いている後悔と共に、忘れてしまいたくないんだ。

忘れないまま、最適に変わっていききたいんだよ。

「なんというか、変化が欲しい」

一応、声に出してみたりもして。

「何に對してですか？」

そんな独り言にも反応する眼鏡っ子メイドの翼である。

僕の妄想なんだから、どれだけ小さな声で呟いたって筒抜けなんだろうけど。

「人間に。つか、個人に」

「またはや問いますけど、具体的にはどんな感じにですか？」

「アレだ。人に一つだけの絶対的な個性を求めているってのが、なんか嫌なんだよ」

「これまた厄介なことを……」

そこまで、変なことなんだろうか？

「ほら、どこかの物語のヒロインで、ヤンデレ属性持ちつてのがいるじゃないか。僕としては、そのヤンデレヒロインが、病んでたのが癒えて、次第に主人公や誰にも依存しなくなっていく……とか、そういうのを見てみたいんだよ」

「とどのつまり？」

「常に成長し続ける——個人つてのが、そういうものであつて欲しいなと思うだけなんだ。思ってるだけで、思ったからどうにかなるわけでもないんだけどさ」

主人公にしか心を開かないヤンデレヒロインに、いつの間にか女友達が出来ているって感じに近いかもしれない。

そんなことがあつたって、良いじゃないかってね。

ヤンデレがヤンデレじゃなくなったり、ツンデレがツンデレじゃなくなったり。生きている内に、人つてのは変わりますよってね。

「自分以外の他者に夢見すぎじゃないですかね……」

「僕よりも優れている人間が、この世界にはたくさんいるって信じていんだよ。いずれは、災害を根絶やしに出来るような人間たちがいるってさ」

少なくとも今は、根絶やしにされる気配さえない。

そんな都合の良い未来くらいは、妄想したって良いだろう？

「どうして、僕よりも頭の良い人が、地震を根絶やしにしようとして行動しないんだろうね？ あれだけ、災害を憎んでる人たちが、テレビに出ているのに」

子供みたいにわめき続けて、都合の悪いことから目を逸らして、氣にくわないものを貶し続けている。他にも戦争をしたりとか。

どうして、そんなことばかりしているんだろう？

どうして、僕よりも優秀な頭脳を持っているのに、災害を根絶やしにすることよりも、人を貶したり傷付けたりすることに重点を置いているんだろう？

僕には、わからないよ。

「考えはするものの出来るわけがないと思つてたり、或いはそこまで情熱を持ってないからじゃないですかね。というか、それをどこぞの他人に委ねてるご主人様に言われたくないで

す」

確かに、僕も自分の脳みそに自信がないから、いつかどこかで誰かが何とかしてくれると思っっている節はある。

我ながら無責任な気がするよ。

確かに、僕が彼らと同じくらいに優秀だったとしても、何が出来るかとはわからない。

偉そうな口を叩くだけで終わるかもしれない。

でも、劣っている僕よりは、彼らの方が遙かにマトモなことが出来るはずなんだ。僕はそれを信じている。

だけど、翼には翼なりの言い分があるらしい。

「そうかな？」

「そうです。あと、テレビに出てくる人なんて、全体から見れば本当に一部ですよ。一部も一部。個性的な一部。まあ、そういう人たちを見て、普通ってこうなんだと錯覚している人がいるような気がしないでもないですが」

普通といっても、色々な普通があるのです。多分。

「ご主人様はどうでしょう？ 普通の人なんですかね？」

「大人になるかもわからない、冴えないボンクラ学生であることに、一票入りたいね」

青春モノで言うところの、『特別』にはなれなさそうだ。

「それ、具体的に何歳くらいなんですかねえ。精神年齢ってヤツは」

「さあ？ 何歳くらいなんだろうね？ 一応は、もうそろそろ義務教育が終わりそうなくらい、年齢を重ねてきたつもり

だけれども。頭の中は——胎児の頃から変わっていない気がする」

身体だけが大きくなったのかもしれないな。

「胎児って……その時、産まれてないじゃないですか」

呆れた表情を浮かべる翼。

確かに、まだ産まれていないんだろうけど、数ミリ程度のちっぼけな脳はあったと思うよ。

そして、その脳は——。

「胎児の時点で、腐ってしまったんじゃないかな。半分ほど」腐らずに残った脳の、さらにもう半分は、今も現在進行形で腐っているんだろう。少しずつ、けれども確実に。

だからこそ、僕はいつも何かを忘れてしまうんだ。怒るってことも——おそろく、きつと。

「時々、自分の存在が身体のどこにあるのかわかんなくなるんだ。ボンヤリと何かを考えている箇所か、たまに何かを叫んでるみたいに痛み出す箇所か。脳か心臓。どっちに、僕という存在が宿っているんだろうね？」

僕は問いかける。僕の妄想に。

「身体の外側についてるんじゃないですかね？ 誰にも見えない、外付けのハードディスクみたいなのが」

翼が答える。主人である僕に。

「それ壊れたら、僕は死ぬのかな？」

「リセットされるかもしれませんがね。真っ白って感じに。弱くてニューゲームってやつですよ、きっと」

「僕は、そこまでマゾゲーマーになりたくないなあ」

「十数年、そこそこキツイ難易度でも生きてるんですから、なんとかなるかもしれませんよ」

「多分、それは無いと思うよ」

僕は、鏡に映った自分自身と話していた。

女の子の姿の僕。

僕の中にいる彼女。

クローンみたいな存在に近いかもしれない。

いつまでも飽きることなく、自分自身を慰め続けている。

いつまでこうしていれば良いんだろう？

いくら自分を慰めても、癒える気配が全く無いのに。だん

だん虚しくなってきたような気がする。

「でも、どうしてなんでしょうね？ 弱くてニューゲームの方があり得そうなのに、強くてニューゲームを望む人が多そうなのは」

「そりゃ、人生の難易度高すぎて、ヌルゲーが良いって人がいるからだと思うよ」

難易度にもピンからキリまであると思うけど。赤ん坊は、産んでくれる親と産まれる場所を選ぶことが出来ないのだから。

「ご主人様の人生はどうですか？ クソゲーですか？ ヌルゲーですか？」

「そこそこ楽しいと感じる程度には」

世間一般的に見て、かなり恵まれている方なのかなと思うけど。

「なるほど、なるほど……でも……あ」

あ、ってなんだ？ 僕が気付かなかったことで、何かマズイことでもあったって言うのか？ 勘弁して欲しいなあ、もう。

「今、ご主人様、ぼんやりと死にたいって思ってますん？」

「……実は、ちょっと、かも？」

しかも、それなりに当たっているようだった。

「親のことを考えた瞬間に、死にたいって思ったんですね」

「漠然とだけだね」

「心底、憎いほどに嫌いなんですか？」

さあ、どうなんだろう？ 僕はそこまで親のことが嫌いな
んだろうか？ 僕にはまだ、憎いって感情が残っているんだ
ろうか？

ただ、それでもわかっていることがある。

「育ててくれたことに感謝はしてるさ。でも、いつも異星人
と話しているような気分になる。言葉が成立しているのか不
安になってくるんだよ」

「相互不理解ってヤツですね」

残念なことに。

おまけに彼らは、自分の言葉が常に相手に伝わっていると
思っているからね。すごく性質が悪い。

「かと言って、ご主人様の言葉が誰かに理解されるものかど
うか、それがわからない以上、一概には言えませんけどね」

「わかっているってば」

それでも、どこことなくおかしいと感じてしまう。

「んで、わけも分からなく死にたくなると。ひよつとして、
自殺願望じゃありませんか？ 親のことで、死んだら楽にな
れるか什么的な感じで」

「それにしても、ボンヤリとしすぎているよ」

希死念慮って言葉がある。

死にたいと願うことを指す言葉だ。

死ねという幻聴を聞いているからだとか、ただ死にたくな
ったからだとか、自分でも客観的に理解できない理由で死に
たくなる。

そういう意味なんだそう。

自殺願望とは違うらしい。

今の僕は、それに当てはまるかもしれない。もっとも、希
死念慮のフリをした自殺願望の可能性がある気もするけど。

「とにかく、痛いのはヤダな」

「ふと思ったんですけど、少しは我慢したらどうですかね？」

「ダメ、死んじゃう」

「どうせ、最終的に死ぬんだから良いじゃないですか。それ
に、痛みのない人生なんて妄想上にしかありませんよ」

それもそう。

痛みのない人生なんて、この世界に痛みという概念がある
時点であり得ない。

でも、出来ることなら、苦しいことや痛いことを回避して
生きていたいよ。

「まあ、ご主人様の気持ちもわからなくはないですが。あま
りにも過剰すぎるような」

「殴られたり、蹴られたり、髪の毛を掴まれたりした後って、
泣きそうなくらいに嫌な気持ちになるんだよ。辛くて、痛く
て、気持ち悪くて。だから痛いのは嫌いなんだ」

ところで、僕が痛がると、誰かが笑うのはどうしてなんだ
ろう？

傍から見ると、ピエロみたいに見えるのかな？

滑稽な振る舞いをしているように見えるんだろうか？

僕には、彼らの笑いのセンスがわからない。

「……ただのクソ野郎にしか思えないのは、気のせいですかね？」

「なんとなく、僕もそんな気がしてきた……」

「どういう風に生きたら、僕が痛がるのを見ながら、楽しそうに笑えるようになるんだろうか？」

「ちよつと怖いけど、訊いてみたい気もする。」

「きつと、暴力の中で育ったからだと思いますよ。朝から晩まで、日曜から土曜日まで、正月から大晦日まで、とにかく暴力まみれ。三度の飯より、暴力が大好きって感じに育ったからでは？」

「それ絶対に、歪んでる気がする」

「まるで、どっかの創作物に出てくるような狂人みたいだ。」

「最初から最後まで、変質することの無い記号的存在。」

「でも、この世界を探せば、そこそこの数がいそう。」

「ご主人様の主観では、歪んでるように見えるんでしょうね」

「少なくとも、その点に関しては僕が間違っていないと思う。」

「思っていたいよ」

「痛いことが当たり前だなんて、そんなことが普通であつてたまるものか。」

「そもそも、痛みなんてなければ良いのに」

「そんな僕に賛同するかのように、翼がポツリと呟く。僕の主観は信用ならないから、本当に賛同しているかどうかかわからないけれど。」

「でも、一応想像してみる。」

「痛みのない僕。痛みのない世界。痛みのない宇宙。なるほど。ほんの少しだけ、良さそうな気がしないでもない。痛みがなければ、痛みに怯えることもないんだろうなあ。」

「でも、痛くないってのはそれはそれで怖いや」

「それは、またどうして？」

「痛みを感じないまま、死んじゃうつてのも——それはそれで怖いものがあるからだよ」

「苦痛に悶えながら死ぬよりも、痛みに怯えないまま死ぬ方が怖いと思うんだよ、僕は。」

「ところで、色々脱線してきたけどさ、僕らは死んだらどうなってしまうんだろうね？ より正確に問うなら、死んだ後に僕はどこに行くのか、なんだけども」

「長く脱線して、原点回帰がそれですか……まあ、話には付き合いますけど」

「なんだか、曖昧な話ばかりを続けていた気がする。無意味じゃないけど、かといって有意義でも無いような。」

「語り尽くされた禅問答。その繰り返し。」

「きつと、一晩で答えが出るような問題じゃないんだろう。」

「どれだけ月日を重ねても、生きている人は死んだ人のことなんてわからないままなんだから。」

「タマシイにでもなるんですかね？」

「永遠不滅のまま、どこかを彷徨い続けるのか？」

「……冗談」

「死んだ魂は、天国と地獄のどちらかに行くと言われている。」

悪い子は地獄へ、良い子は天国へ。
幼い子供に、親が教えるお伽話だ。

僕としては、シンプルすぎて面白みがないと感じてしまうけど。

「そういえば、どっかで聞いたんだけど、自殺したら天国に行けないらしいよ」

「ソースはどこですかね？」

「……さあ？ 何でも人のせいにしたがる、誰かから聞いたような気がするよ」

自殺は良くない。

けれども、どうして良くないのか？ なぜ良くないとわかってるのに自殺する人がいるのか？

それらを考えないまま、オウムのように言葉を繰り返して
いる人を見たことがある。

大人のフリをした子供だった。

自分にとって都合の悪いことが起きると、何かのせいにしたがる人だった。

自殺する人は減らないな、と僕は彼を見るたびに思ったものだ。だから僕は、少しだけ天国を信じていない。

「そもそも、死んだ人が辿り着く場所なんてあるんですかね？」

そんな中、ふと翼が問いかけてくる。あの世があるかどうか、タマシイになる僕らがどこに辿り着くのか。

——そんな場所、無いかもしれないけれど。

「あると信じた方がマシなんだろうよ、きつと」

「本当はあの世なんて無いけれど、生きている人はそれを知らずにあると信じて生き続ける。抛り所にしながら。延々と死ぬまで」

「藁にでも縋ってるみたいだろ？」

「……かも、しれませんがね」

きつと、数え切れないほどの藁があつて、僕らはそれを使い捨てながら、底に沈まないようにして生きている。

「なあ、翼」

「なんです？ ご主人様」

ふと、僕は問いかける。

翼に向かって、些細な疑問を一つだけ。

「もし、藁すらも無くなってしまったら、僕らは何に縋って生きていけばいいんだろうね？」

人は何かに縋って生きていく、と聞いたことがある。

誰もが、何かに心を寄せないと何も始められないように。

——もしそれが、塵一つ残さず消えたらどうなるんだろうか？

「さあ、どうでしょう？」

けれども、翼は無関心そうな口ぶりだ。

「——案外、それなりになんとかなるんじゃないですかね？」
少しだけ何かを突き放すように言うのだった。

そういえば、昔、奇妙な夢を見たことがある。

隕石の夢だ。

突拍子もなく、とってつけたような話だけでも、たった今思い出したんだ。誰でも良いから、信じてほしい。

最初は、どこかにある月面から映像が始まる。

僕の手には、拳銃が握られていた。

具体的にどんな形をして、どんな名前の銃だったのかは覚えていない。

多分、メタファーか何かだったんだとは思うけど。

その銃は、引き金を引くと空から隕石が落ちてきた。一回引くごとに、一個ずつ落ちてくる。同じように、十回引けば以下略。とにかく、隕石を落とす機械のようなものだった。

僕は、その銃を何度も引いていた。

何度も何度も。

引き金を引く人差し指がもげてしまうまで繰り返していた。指がもげてしまうと、別の指を使わざるを得なくなった。

親指、中指、薬指、小指。

片方の手が使えなくなると、もう片方の手に切り替えてまで引き金を引き続けた。

一個目、二個目、三個目。

引き金を引くたびに、人が死んで、星が死に向かっていく。そこまで隕石を落としてまで僕は何をしたいんだろうなと

考えもしたけど、引き金を引く作業を止めたくなくて思考に蓋をし、両手の指が使い物にならなくなるまで引き金を引いた。

隕石の向かう先にあるのは、地球。

かつて僕がいた星だった。

青い星。

数え切れないほどの人間が、表面を埋め尽くしてしまいうなほど存在している。

少し鬱陶しいくらいだ。

直ちに、隕石を落とした方が良いかもしれない。

そうだ。そういえば、夢の中にいた僕には使命があった。

人類を減らすという使命だ。

彼ら人類は、星の上層構築物を汚染するから、定期的に処理しなくてはならない。人類を処理した後は、上層構築物をアップグレードしてくれる。

誰が星をアップグレードしてくれるのか、誰が僕に使命を与えたのか、誰が僕の世界を作ったのか。

僕は覚えている、知っている、認識している。

人類が神と崇めていた上位的存在。

いや、その神をコントロールできる存在だ。

僕は、彼らをアザーズと呼んでいる。

英語で他人という意味の言葉。

彼らにとって僕は他人であり、僕にとって彼らは他人だ。彼らのような化け物に使う呼び方としては似合っていると

思う。

——彼らは物語を生み出す化け物なのだから。

僕は、彼らによって主人公にされた。物語を引っ掻き回すトリックスター。クレイジーサイコ野郎。ただ機械的に隕石を落とし続けるオートマトンだ。

そんな夢の世界で、僕は一人の少女を殺した。頭の中が破裂しそうなほど人を殺したのに、彼女の死体だけが妙に印象に残っている。

舞台は月から地球へ。

僕は、アザーズの指示によって死体を認識することを義務づけられていた。虐殺と陵辱を好む一部のアザーズに、娯楽を提供せねばならなかったのだから。

そして、僕は彼女の死体と対峙している。

たった今、隕石の余波で壊れた建物の下敷きになった死体と。

直接的にじゃない。でも、間接的に僕が殺した彼女だった。

「——」

彼女は最期に何て言いながら、死んだんだろう？

「——」

思い出せないし、思い出そうとしても上手くいかない。

思い出すのは磨り潰された言葉だけだ。

最期になるはずだった言葉を、圧倒的な不条理が台無しにしてしまったような。

「——」

ひょっとしたら、死体になってから喋ったのかもしれない。最期の言葉を。終わりの言葉を。人生の締めくくりとでもいふべき言葉を。

どんな言葉だったんだろう？

僕は知らない。

知っているのは、彼女の名前だけだ。

隕石の下で死んでいる少女。

彼女は可愛くて、眼鏡をかけていて、家の中での遊びのつもりでメイド服を着ていた。

そんな彼女の名前は——翼、だった。

その世界にも、翼がいたんだ。

翼。僕と同じ名前の少女。ある夜に僕が生み出したイメージナリーフレンド。架空の存在。妄想。虚構。墓場。

「……（物言わぬ翼）」

翼は、瓦礫の下にいた。

「……（物言えぬ翼）」

翼は、瓦礫に全身を潰されていた。

「……（死んでる翼）」

翼は、瓦礫によって死んでしまっていた。瓦礫の下にいて、全身を潰されて、死んでいる。死体だった。軀だった。肉だった。

でも、翼だった。翼の成れの果てだった。

瓦礫の下敷きになりながらも、壊れた眼鏡をかけたまま死んでいる。この死体は翼ですよと、ハッキリと主張している

かのように。

そうだ。死体があるんだ。

翼は、この世界では実在している。

物理的に存在していた。ちゃんとした身体がある翼なのだから。

別の世界ではイマジナリーフレンドでも、この世界では実在していた人物だった。

けれど、この世界の翼はもう死んでいる。

動かないし、喋らないし、生きていない。

今となつては、ただの肉の塊だ。

いや、肉の塊が残っているだけマシなのかもしれない。もし隕石が直撃していたら、彼女の身体は肉片一つ残っていないだろうから。

「……？」

ここにあるのが肉の塊だけなら、彼女はどこに行ってしまったんだろう？ 翼はどこだ？

肉体に宿っていたはずの翼自身は——今、どこにいらっしゃる？

「——遠く、ですよ」

ふと、すぐそばから声が聞こえてきた。

聞き覚えのない声だ。

男か女かよくわからない中性的——或いは無性的な声だった。

生きているのか死んでいるのかさえ分からない。

「お初にお目にかかります、翼様」

振り向いて確かめてみると、そこには誰かがいた。

少なくとも、人間じゃない。

人間の形をしている何者かともいうべきか。

「ワタクシの名は、魂魄卿。どうぞお見知りおきを。もっとも、ワタクシたちは、もうすぐこの星から旅立ってしまうのですかね」

その誰かは、自身をそう名乗っていた。重力に縛られてないとも言いたげな、宙に浮いているような格好で。

まるで、足のない幽霊のように。

「ワタクシが何者であるか、ですか？ ふむ、そうですね……ワタクシはワタクシであるとしか言えませんが。ただワタクシという存在を簡潔に説明するとなれば——ただの導き手、でしょうかね」

魂魄卿は、若干混乱している僕に対して、芝居がかった口調で説明してきた。

そして、その証拠だとばかりに右手を差し出してくる。指を広げて、拳の中にあるものを見せびらかすかのように。

「……？」

けれども、その手には何も無かった。

影も形もないものが、そこにあるのだと妄言を吐いているかのように。

「いますよ、ここにちゃんと。翼様には見えていないのかも知れませんが、ワタクシにはそれが見え、導くことが出来る

のです」

だが、自称魂魄卿は、この手の上にいると言っている。

僕には見えないような、何かが、何者かが。

「タマシイたちの導き手なのですよ——ワタクシは」

タマシイが、そこにいるのだと。

肉体を離れてしまった、不可視の存在たちが。

「どうして、ここにいるのかですって？　そうですね……ワタクシがタマシイのいる場所ならどこへでも向かうから、というのは理由になりませんか？　事実、その通りではありませんが」

結局、彼はタマシイをどうしたいんだろう？

「まだ生まれてもない、別の星へと導くのですよ。そこで未練を残したタマシイたちに、来世を与えるのです。新しくやり直して、彼らが満足する結末を迎えるために」

碌な結末じゃなかった者たちに、救済を。

「その通りです——なぜなら、ワタクシは魂魄卿」

そのために、魂魄卿がいるのだと。

「あらゆる宇宙や世界、時間さえ飛び越える、タマシイの導き手なり。全てのタマシイに救済を、日常を、幸せを。いつかどこかで誰かが、そんな存在を望んだように」

彼らは、そう在るように作られている。

何者かが望んだとおりに。

「ワタクシは——タマシイたちを救える真実でありたいのです」

魂魄卿は、どこへでも現れる。

そういう風に、出来ている。

「ふむ、ワタクシ一人では、全てのタマシイを救えるわけがないとおっしゃるのですか？　なるほど、それは一理あります。もつとも、それは魂魄卿が一人しかいないということを前提とすれば、ですが」

あらゆる時間、あらゆる世界、あらゆる宇宙。

星の海が内側から破裂してしまいそうなほど、ありとあらゆる可能性が存在していた。

パラレルワールド、とも言うべきものが。

——限りなく無限に散らばっているのだ、と。

「さて、翼様。ワタクシは、あなたが殺した者たちのタマシイを導くために派遣された魂魄卿です。おっと、彼らを殺したあなたに文句を言いたいわけでも、裁きを下すつもりもありませんよ」

そして、そのうちの一人はここにやってきた。

自分の役割を果たすために。

「ただ、あなたが別の世界に旅立つ前に、一つだけ聞いておきたいことがあります。教えていただけませんか？」

その前にたった一つだけ。

魂魄卿は、僕に問いかけてくる。

「なぜ——このような夢を見ているのですか？」

そこで僕の意識は途切れた。

ブツリと何かが断ち切られてしまったかのように。

真っ暗な闇の中へと沈んでいって、何も聞こえなくなる。
そんな闇の中で、僕は捨て台詞のような言葉を呟いたはず
だった。

今でも何となく覚えているし、時々思い出してしまう。

「僕は、自分が落とした隕石によって、独りぼっちになって
しまう夢を見たかったんだ」

——もう、そんな夢なんて一度で飽きてしまったけれども。

首を絞められる感触で目が覚めた。

目を開けて誰が僕の首を絞めているのだろうと、周囲を見渡してみるけど誰もいない。

首を絞めているのは僕の手だけだった。

夢の中にいた僕自身が自殺へと導いている。

窒息死への道を。

僕は、その手を動かそうとするけど、誰かにコントロールされているみたいで上手くいかない。

誰かが僕の脳を操作しているんだろうか。赤い配管工みたいに。

「翼？」

ふと、そんな言葉を思い出した。思い出しながら声に出してみると、核心を突いているような気がしてくる。

「そうですよ、ご主人様」

そして、それに答えるように翼が姿を現した。

彼女の姿がどことなく鮮明に見える。

窓から差し込む光が少しだけ明るいからだろう。夜が明け始めているみたいだ。

少しだけ両手に意識を集中すると、自分の手の力が少しだけ緩まり始めるのを感じた。このまま身体の主導権は僕に戻る。

「……どうして、僕の首を絞めていたんだ？」

そのまま、翼に問いかけた。

目の前にいる翼が、僕の首を絞めた犯人であるという前提で。

対する彼女は、唇を薄く曲げている。

「なんとなく、ですよ。意味なんかありません」

「衝動的？」

「本当になんとなく——こうした方が良くなって、思っただけ」

「僕の首を絞めて？」

「死なせてあげた方が、良いのかもって」

確かに、僕は死んだ方が良いのかもしれない。

死にたくないとか、死ぬのは嫌だなんて、あれこれ言っているけれども、本当は死んだ方が良いことだってあるのかもしれない。

イマジナリーフレンドの翼が、僕の無意識をくみ取ってそう言ってるんだ。本当かどうかはともかくとして、一考の余地がある。

——けれども。

「僕の罪悪感が、そう言ってるのか？」

「そうかもしれないですね。感情を掻き立てられるような夢を見たんですから」

僕は、夢を見ていた。

昔の話だ。昔見た夢のはずだった。

けれども、何かがおかしい。

あの奇妙の夢を見たのが、たった今のようない感じがしているからだ。

「そうですよ、ご主人様。なんやかんやあって、ご主人様は今、夢を見ているんです。夢オチのために用意された、都合の良い夢じゃありません。どれも現実で、ただの物語なんです」

「物語……？」

「そうです。物語仕立てに作られた、あたしたちの現実です」

僕が隕石のことで悩み、イマジナリーフレンドの翼を生み出し、彼女と色々な話をして、僕が隕石を落とし続ける奇妙な夢を見た。

いや、果たしてそれはただの夢だったのだろうか？ 僕に

はそれを自分で決める自信が無い。

「物語のような、現実」

「過剰なほどに装飾された、ですね」

僕がいるこの世界は現実だ。

紛れもなく、物理的に存在している。

物語なんかじゃなくて、実在しているはずなんだ。

でも、この現実が物語仕立てにされている。そういう筋書きや背景を誰かが求めているかのように。

「この世界は、意図的に狭く作られている。都合の良いことが起きやすくなっている。物語を円滑に進みやすくするためにね」

「都合の良いことって、例えばどんなことですか？」

「全般的に言えば、僕の目の前に君が——翼が、いることだ」
まるで、僕の過去と未来が直接的に捻じ曲げられたみたいだ。

「ここにいる翼は——ひょっとして、あの世界の翼だったりするのかい？」

「ただけ、些細なことを問いかけてみる。」

「そうだとしたら、どうします？」

きつと、僕はどうもしないだろう。

どうもしないんじゃないかって、出来ないのかもしれないけれど。

「てっきり、僕のイマジナリーフレンドだと思ってたんだけどな」

「その答えで合ってますよ。ご主人様の脳内妄想の範囲内で構成されている空想の友達で。まあ、あの夢の世界……とどのつまり、パラレルワールドに、別のあたしがいたってだけの話ですがね」

彼女の言い分だと、ここにある世界とは別にパラレルワールドがあるらしい。

一つとして同じ形のない世界が、僕の見えないところにゴロゴロと転がっているんだろう。

そんな別の世界で、僕は彼女を殺した。

アザーズに導かれながら、隕石を落とし、死へと導いた。直接的にだったのか、間接的にだったのかどうかはわからない。

とにかく、結果的に彼女を殺していた。
夢を見ている僕には、隕石を落とす理由があった。

隕石を落とすたびに、胸の中が安心して穏やかになっていくから。

まるで、隕石を落とすことが自分の幸せと直結しているみたいだった。落とすたびに、安心して満たされていく。

あの安心感は、自分の未来を潰すことで芽生えるものだったんだろうか？

「そこでご主人様は、自分の未来を断ち切った」

偏在転生という言葉がある。

僕も詳しくは知らないけど、内容はこうだ。

全ての個人に別々に備わっているはずの自己——つまりは自分というものが、実は一つだけしか存在しておらず、時間や場所を超越して輪廻転生を繰り返しているだけ、というものの。

つまり、僕は死んでも転生してしまう。

別の自分になり、延々と生を続けることになる。

だから僕は、自分の未来を断ち切ってしまったかった。

全ての生き物を滅ぼしてしまえば、後は過去の誰かに転生するだけ。

そうやって、延々と転生を繰り返していれば、最後には転生できなくなるんじゃないかって。

全てが滅んだ後の未来に転生するなんてのは、したくても出来なくなるだろうから。

そうすれば、終わることが出来るんじゃないかって思っていた。

だから殺した。見殺しにしたんだ。

——夢の中の僕が、隕石が落としてくれたから。

「でも、どうして死んだはずの君がいる？」

「あたしがあたしになっただけです。夢の中でご主人様は、あたしを他者だと認識したんですよ。ご主人様から生まれているはずのあたしを」

つまりは、僕が翼を自分の分身とは思えなくなったから。

「翼は僕だよ」

偏在転生を信じるとすれば、だけれども。

「確かに、そうかもしれない。可能性はゼロじゃないです。でも、だからといって、あたしのご主人様であり、ご主人様があたしであるとも限りません。前世がどうの、来世がどうのと認識できるものなら、してみたいです」

ごめん、それは僕にも出来なさそうだ。

「ねえ、ご主人様」

翼が、僕に声をかける。

そして、口元を薄く歪めながら——問いかけてくるんだ。「支離滅裂で、意味不明な自己満足の夢を見るのは——もう止めませんか？」

僕の答えは、たった一つだけだ。

こうして、僕は翼を殴った。

翼という少女を殴った。僕と同じ名前の彼女を殴った。自

分が名付けた女の子を殴った。自分自身を殴った。空想上の友達を殴った。他人を殴った。誰かを殴った。死体を殴った。とにかく殴った。

殴る以外にどうすれば良いのかわからなかったから。

僕の頭の中は、グチャグチャだった。

何がどうなっているのかわからないまま、勝手に動く身体に振り回されている。

僕は、翼を殺そうとしていた。

どうして殺そうとしているのか、自分でも上手くは言えないけど、殺さないといけないと思ったから殺そうとしている。

殴る、蹴る、刺す、叩く、捻る、踏む、絞る、潰す、折る、焼く、切る、晒す、犯す、壊す、殺す。

翼を殺す。僕を殺す。翼と僕を殺す。

僕が僕を殺す。翼が翼を殺す。

それが一番最善なんだろうって。

気が付けば、僕は僕自身を殴っていた。

自分の頭を、何度も、何度も、ぶっ壊れるまで。

物理的に、精神的に。

拳で、言葉で。

殴る。殴る。暴力を振るう。

マウントポジションを取って、僕は翼の顔を殴ろうとする。けれども、彼女はとっくに死んでるみたいにピクリとも動かない。

気が付けば僕の暴力も止まってしまった。

動かしたくても動かない。

はたして、僕は誰を殴っていたんだろう？

なんだか良く思い出せない。

頭の中の試験管が全部割れて、液体が下水道にぶちまけられて、スッカラカンになってしまった気分だ。

もう何も無い。

残ってるのは、グチャグチャになった外面だけだ。タマシイの抜け殻。肉の塊。まるで、死体になった気分だ。

いや、ひよつとしたら僕は本当に死んでいるのかもしれない。或いは死んだ夢を見ているのかもしれない。どっちでも良いけど。

僕の死体は動かない。指の一本や瞬きさえも。けれども、視界は真っ黒に染まっていく。闇の中へと沈んでいくかのようだ。本当に死んでいるのかも怪しいけれども。

でも、一つだけ声に出せそうな言葉がある。

断定するような一言を。

「――悪い、夢だな」

今の僕は、悪い夢を見ているんだ。

■エピソード

そこで、僕は目が覚めた。

窓から差し込む光が、僕の目蓋を焼いている。ついでに、外からは鳥の声が聞こえてきた。どうやら朝を迎えたらしい。

「起きて」

ふと、誰かに身体を揺さ振られているような気がした。ゆさゆさと眠りから起こそうとしているかのように。

眠り？

もしかして眠っていたんだろうか、僕は。

「起きて、起きてよ——」

聞き覚えのある誰かの声が聞こえる。甘く響く女の子の声だ。なんとなく安心する。心地よい目覚めになりそうだ。

「——ご主人様」

ちよっとだけ台無しだった。

「誰が、ご主人様だ」

一応、事実ではあるけども、朝からその呼び方はいかがわしいと思う。だって、僕は男の子だもの。

「ご主人様はご主人様でしょ？」

「そうかもしれないけど、起きたばかりの僕に向かって言うのはちよっと……ちよっと心臓に悪いや」

僕を起こしたのは、翼という名の少女だ。目の前にいて、眼鏡のレンズ越しに僕を見下ろしている。

「目覚めはどうです？」

「悪くはない」

「眠るってどんな感じですか？」

「妙な夢を見ることもあるけど、心地良いよ。もし眠れなくなったら、眠れないけど眠りたいと感じるほどに」

「そうですか。あたしは眠れませんから、そこらへんよくわからないんですよ」

「不便な身体だね」

「そもそも肉体さえありませんからね、あたしは」

彼女は、僕のイマジナリーフレンドだ。架空の友達。カットアップによるツギハギ系ヒロイン。ようするに、僕の都合の良い妄想だ。

「でも、なんだかんだで眠れてるじゃないですか、ご主人様」

「たまたまだよ。たまたま、眠ってしまっただけだ」

何に縋るか、という話をしたところから僕の意識は途切れている。その間に、変なことを思い出したような気がするし、変な夢を見たような気もする。

どんな内容だったかは覚えてはいるけれども、どれも支離滅裂でありながら生々しかった。少し怖いくらいに。

「夢ってそういうものだと思いますけどね。そうじゃないと思うのなら、どこから電波を拾ってきたのではとしか」

電波。確かにそんな気がしないでもない。

誰かからの電波を受けて、僕は奇妙な夢を見た。

まるで、コントロールされているみたいで気持ち悪い。

「それにしても、僕をコントロールしているのって誰だろ

う？」

「さあ、どうでしょう？ 神様じゃないですかね？」

「神様？ アザーズじゃなくて？」

「本物の神様のことですよ。全てを掌握している絶対的存在。いるかどうかはわからない作者に——ある特定のものを書かせようとしている何者かが。ご主人様に夢を見せたんじゃないでしょうか」

そう考えてみると、すごく不気味だった。

僕のやることなすことが、神様なるものによって定められているみたいで。

自分というものがアヤフヤになっているみたいで。

怖くて、気持ち悪い。

「ちよつと死にたくなつてませんか？」

そうかもしれない。今の僕は少しだけ死にたくなっている。ほんの少し。けれども、思っていることは確実なんだ。

「死にたいですか？」

「自分の手で死にたくないよ」

だけど、僕は自分の手で人生を終わらす気にはなれなかった。

誰かに殺してもらえれば、それで楽になれるんじゃないかって。

身勝手だろうけど、そう思う。

でも、自分の手は動かない。指の一本さえ、ピクリとも。

まるで、僕が死体になってしまったみたいだ。

「ご主人様」

——ふと、そんな僕の首へと翼の手が伸びてきた。

十本の指が、僕の首を優しく包み込む。

触れるか触れないかの一步手前。

その指が皮膚に触れた瞬間から、絞殺が始まるんじゃないかと思えてきた。

翼が、僕に手をかけようとしている。殺そうとしている。

死なせようとしている。

僕はそんな彼女に向かって、微笑みを返すことしか出来なかった。

「ご主人様」

翼の指が動き、開いた指を少しずつ閉じていく。

僕を絞め殺すために。死なせるために。

けれども、翼の指先は僕の身体をすり抜けてしまった。

僕の身体に触れることさえ出来ないでいる。

まるで、幽霊のように。

「……翼」

僕は、彼女の名前を呼んだ。

なんて言えばいいのかわからなくて、彼女の名前を呼ぶことしか出来なかったから。

「ご主人様」

翼は、僕に名前を呼ばながら微笑む。どこか泣きそうに見えるのは、僕の気のせいだろうか。涙の気配なんてものが、

欠片もないって言うのに。

「僕は……」

今度は僕が、翼の首に手をかける。

手を伸ばして、指で優しく包み込むようにして。

僕は、翼を殺すことによつて何かを提示しようとしていた。

何かを思いつきはしても、それを言葉に出来そうになかったから。

けれども、僕の手が翼に触れることはない。

翼が僕に触れられないように、僕も翼に触れることが出来なかった。

夢の中でなら、触れることもあり得たかもしれない。

だけど、ここは僕が現実だと認識している世界だ。現実と妄想が物理的に触れ合うことはない。そういう風にこの世界は出来ている。

——結局、僕らの手は互いに届かなかった。

「結局」

ポツリ、と翼が呟く。

「ご主人様は、あたしを物理的に殺すことが出来なかったんですよ。とても残酷なことに」

彼女はそう言いながら、僕の顔に触れる。

触れていないはずなのに、触れているフリをしているんだ。

「あたしは、自殺する勇気のないご主人様の代わりに、殺されてあげることも出来ないんです」

もしも、僕らが触れ合うことが出来たら。

——どうなっていたんだろうか？

「不思議ですね」

「何が？」

「あたしも、ご主人様も——結局、自分さえ殺せなかったなんて」

この手で触れることさえ出来たなら、自分くらいは殺せたかもしれないかっただろうに。

「なあ、翼」

「ねえ、ご主人様——いえ、『翼』様」

僕は翼に何かを問おうとしたけれども、彼女の使った呼び方に少しだけ驚いてしまった。

翼。彼女の名前であり、僕の名前でもある。

彼女は——僕を初めてそう呼んだんだ。

「朝ですよ。もう、朝なんです。隕石が落ちるかどうかで話をしたって、漠然と死にたいと思っていたって、変な夢を見ていたって、朝ってものはやってくるんですよ」

少なくとも、僕の世界が変わらない限りは。

けれども、どんな世界だろうと絶対は無いと思う。僕がいる世界で、どれだけ朝を迎えられるかわかったもんじやない。いつか朝が来ない時が来るかもしれない。

——この世界が、誰かの見ている夢でありますように。

だから、僕は願った。

この世界が、永遠に朝が滅ばない世界の夢でありますようにと、僕は少しだけ願い始めている。

「翼」

翼と迎える朝だけは、無条件に信じてても良いような気がしていたから。少しだけではあるけども。

「どうかしたんですか、翼様？」

彼女が問いかけてくる。朝日にその姿を照らされながら、溶けてしまいそうなほど淡い笑みを浮かべている。

脆く壊れそうな微笑みで。

だから僕は、繋ぎ止めるように言葉をまき散らした。

まるで、呪いのように。

「行かないで、翼。僕が、いつの日か隕石のことを気にせず
にいられるまで、受け入れられる時まで」

その時が来るまで。

それ以降も。

ずっと、ずっと、いつまでも。

「翼は、翼のこと好きですよ」

僕は、呪い呪われ。

隕石に怯えながらも、生きていく。

F I N .

■あとがき、という名の言い訳

こんにちは。お久しぶり、或いは初めまして。

作者の冬野氷夜です。

何年かぶりのコミックマーケットサークル参加となりました。本作がサークル・奈落兎の第一作目になります。

この物語は、奈落兎が今後出す予定の物語——にちよこつとだけ関係のある話として書きました。

男の子と女の子が話し合うだけの話。でも、その話の中で、奇妙なものにちよつと触れてしまう……という感じの。怪しげな魂魄卿とか。

とまあ、こんな怪しげな物語で幕を開けたサークル・奈落兎ですが、今後の活動を見守っていただけると幸いです。

さて、言い訳要素どこ言ったって気がしてきましたし、色々と言いたいことがあるような無いような気もありますが、この辺で尺を巻いておきたいと思います。

本編を手にとってください、本当にありがとうございます。

それでは、次回作でお会いしましょう。
アデュー。

スペシャルサンクス……サークル・奈落兎代表の秋山君。

隕石に怯えながら、 僕たちは。

2015/08/16 発行

奈落兎

null.hall.rabbit@gmail.com

冬に買った日記帳 @ 冬野氷夜

hyoya.fuyuno@gmail.com

<http://d.hatena.ne.jp/fuyunohyoya/>



奈落兎

naraku usagi